鷹の目の狩人 IX

治に居て乱を忘れず

しろはく古地図と城の博物館富原文庫
代表 富原　道晴

鷹の目の狩人といいながら、急に白内障になった。目の水晶体が濁り、全体に靄（もや）がかかったようで、曇った日には空と道路と車の区別ができず運転できない、小さい文字が読めない、信号のような発光体はよく見えるが看板等反射物が見えづらい。眼科の先生は急になるはずがないといわれるが、会津の展示会の準備が終わると同時に発病したことから、精神的な気力も影響があるように思える。大きな文字の本の存在の意味を実感し、名刺の郵便番号の大きさが読めない、初対面の人に出す書類としては名刺がいかに不親切な存在かと思い知った。聞いてみると 65 歳過ぎの友人の発病はかなり多い。手術は目の水晶体に切り込みを入れて、白濁物を吸い出し、人工レンズを入れるだけで、やってみると、目だけ麻酔がかかり、意識もはっきりして、白濁物の吸い込みの音も聞こえる、痛みも何もなく、目だけ水没している感覚で、30 分ほどで終わった。始め、左目のみの予定が、結局、両目の手術となった。八重の桜では山本覚馬は白内障で失明している。技術の進歩はありがたい。ただ、目の手術ということで、子供たちを始め随分心配をかけ、手術の翌日は顔面半分眼帯で覆われていた。本人が何事かと思う風体である。2 回目の手術はみんなに内証にした。ただ、眼底出血があり、手術前にレーザー治療を左右各千発実施、こちらも衝撃による圧力感はあるが傷みも何もない。ただ、二カ月かかり、都合三カ月、濃霧に包まれた日々であった。心眼があるとうそぶいても、運転は妻任せ、資料調査はルーペで千頁以上の資料集を読破と不便極まりない。つくづく、やるべき時にやる、いつ何があるかわからないということを思い知らされた。

9月2日まで真田氏歴史館にて開催されていた富原道晴氏の所蔵品展示企画展「真田家の城郭とその戦歴」のポスター

『治に居て乱を忘れず』（『易経』より）とは故事であるが、いろんな講演会で皆さんに申し上げた。人生何があるかわからない、未来を考え対処する極意と心得ている。上杉謙信の相続争い御館の乱、武田信玄没後、長篠の敗北、天目山の武田氏滅亡、後継者信忠を養成した織田信長でさえ、後継者とともに本能寺で最後を迎え織田政権は壊滅した、豊臣秀吉没後の大坂城は落城した。ナポレオンの居たフランス軍は強かった、居ないフランス軍は敗れた。群馬でいうと上杉方箕輪城の長野業政の生存中は武田信玄の上野侵略を防衛した。没後、西上野は武田に席捲された。一人の英雄、天才が生存中は敵を寄せ付けない、まさに磐石である。事業でいうと創業者はすごい、開拓者魂というか、卓越した能力を発揮される。ただ、軍事も事業も組織としては、本来自分がいなくても、成り立つように位置付けるのが、本当の姿である。多くの場合、生存中に後継者の養成は難しい。事業が無事成り立つ間に、事業リスクとしての次代を準備するのが、トップの責任で、真の勇者であることは、歴史の多くの事実が物語っている。

人生の終焉までに出来ることを見つめる、再び来ることのない時間を過ごす、天衣無縫、八面六臂、能力の限りを尽くす、それでも、自分の居ない世界の構築までは出来ない。人を育てることは難しい。自分でやれば、簡単、されど、それでいいのか。多くの経営者が自問自答される。全国に四、五万あるといわれる城跡に見る人生模様が多くを語りかける。歩き回った約四千の城跡に栄枯盛衰の夢の跡を語らい、敗者の歴史が未来をいざなう。人間は社会に何を残せるのか。どのような軌跡を描くべきなのか。大局を見つめることを忘れなければ、大義に生きればと思うのは理想論であるのか。事故は明日自分を襲うかもしれない、偉大な諸先輩に敬意を表したい。